

地域看護学実習での HIV/ エイズ予防普及啓発活動から得た学び

田中 小百合^{*1)}, 松川 泰子²⁾, 徳重 あつ子³⁾

¹⁾ 明治国際医療大学看護学部, ²⁾ 前明治国際医療大学, ³⁾ 摂南大学看護学部

要 旨 【目的】保健師とともに地域看護学実習の一環として行った啓発活動から得た学びを HIV/ エイズに関する知識面と保健師活動の 2 点から明らかにすることである。
【方法】対象は 2010 年 12 月の地域看護学実習中に啓発活動を体験した看護学生 6 名である。対照群として同管内で同時期に実習を行った 5 名を設定し、実習前後に 2 群への質問紙調査を実施した。質問項目は HIV/ エイズ関連の知識問題 30 問と HIV/ エイズの保健師活動に関する自由記述を求めた。知識問題は 1 問につき正解 1 点として算出し、2 群間の比較に t 検定を用いた。自由記述の分析は内容分析の手法を参考に行った。
【結果】知識問題では実習前後の点数差を 2 群間で比較した結果、HIV/ エイズの基礎的問題で有意差がみられ、項目ごとの正答率も上昇していた。保健師活動についての自由記述からは『啓発活動の手段』『啓発活動のねらい』『HIV/ エイズに関する保健師活動の実際』のカテゴリー、啓発活動を体験した学生から多くのサブカテゴリーが抽出された。
【考察】啓発活動という 1 つの実習体験が保健師活動の学びの拡大に繋がることがわかり、保健師とともに主体的に取り組む実習の一内容として意義があったといえる。

Key words 地域看護学実習 community health nursing practice, 啓発活動 educational activities, 質問紙調査 questionnaire survey, HIV/ エイズ human immunodeficiency virus/acquired immunodeficiency syndrome

Received April 27, 2013; Accepted August 27, 2013

1. はじめに

保健師教育の大学化によって、卒業要件を満たすために止むを得ず単位を履修、実習をする学生も多く、卒業時の到達度を確保することの困難さが課題となっている¹⁾。地域看護学実習に関する先行研究では学生が記述したレポートの分析をもとに保健師活動全般を捉えた学生の学び^{2,3)}や技術習得を検討した報告^{4,6)}など、到達度を意識した研究が多くみられる。

本学の地域看護学実習(3週間)は、保健所と管内市町村での実習を主として3年後期から4年前期まで領域別の順不同なローテーションのなかで実施している。地域看護学実習は「個人・家族・集団・地域を対象とした健康問題の解決および予防をめざ

した看護活動を実践できる基礎的能力を養う」という目的のもとに、市町村・保健所での実習を行っている。市町村を中心とした実習構成のため、保健所実習は約2.5日間であり、これまでは感染症結核診査会、結核の接触者検診、乳幼児の精密健康診査の見学が中心であった。しかし、今回初めて保健師とともに HIV/ エイズ予防普及啓発活動(以下、啓発活動とする)を実施する機会を得た。HIV 感染者・エイズ患者報告数はいずれも増加傾向にある一方、HIV 抗体検査件数や保健所等における相談件数は前年と比較して減少傾向にある⁷⁾。このような背景の中で、保健師が担う役割は大きく、学生が主体的に実践する啓発活動から得る学びは大きいと思われた。看護学生関連の先行研究では啓発活動の学びを調査したものはみられず、予防パンフレットの作成⁸⁾と HIV/ エイズの一般的知識を調査した研究⁹⁾のみであった。そこで、地域看護学実習の一環として行った啓発活動から学生は何を学んだのかを把握するこ

* 連絡先: 〒629-0329 京都府南丹市日吉町
明治国際医療大学看護学部
E-mail: sayutana@meiji-u.ac.jp

とを目的とし、HIV/エイズに関する知識面と保健師活動の2点について調査することとした。

II. 研究方法

1. 対象

本研究の対象は、2010年12月の地域看護学実習中に啓発活動を体験した3年生6名（以下、体験群とする）である。対照群として同時期に同管内で実習を行った5名を設定した（以下、非体験群とする）。

2. 実習内容

体験群の保健所実習の内容は、非体験群との合同オリエンテーション、感染症結核診査会、接触者検診の見学と啓発活動であり、非体験群は保健所主催の発達障害の理解を深めるためのセミナーと乳幼児の精密健康診査であった。

事前に保健師からの問い合わせがあり、HIV/エイズは感染症保健活動の中で教授されることを伝え、教科書¹⁰⁾と資料の複写を郵送した。学生は、保健師からHIV/エイズの発生動向や活動の実際に関する説明を受けた後、保健所所蔵の「HIV/AIDSが誰にもわかるDVD」による自己学習を行った。その数日後、学生は本学構内にて保健師3名とともに約60分間の啓発活動を行った。尚、自己学習に使用したDVDの内容は、学生がグループディスカッションを通してHIV/AIDSが他人事ではなく身近なものであるということ学んでいくというものであった。

3. 調査の過程

実習開始前（以下、実習前とする）と実習終了後（以下、実習後とする）に、体験群と非体験群への質問紙調査を実施した。調査の時間的経過を図1に示した。質問項目は、啓発活動を地域看護学実習の一貫として位置付けたことから、HIV/エイズに関する○×形式の基礎的問題10問¹¹⁾（以下、基礎的問題とする）と保健師国家試験の問題集から抽出した20問^{12,13)}（以下、国試レベル問題とする）の合計30問（以下、知識問題とする）とした（表1）。加えて実習前後に「HIV/エイズに関する保健師活動について知っていること」の自由記述を求めた。尚、知識問題の正解は調査後に示すことを伝え、実習後まで意図的に追加学習しないように依頼した。

4. 分析方法

○×形式の知識問題30問は1問につき正解1点として算出した。体験群と非体験群の点数の差の

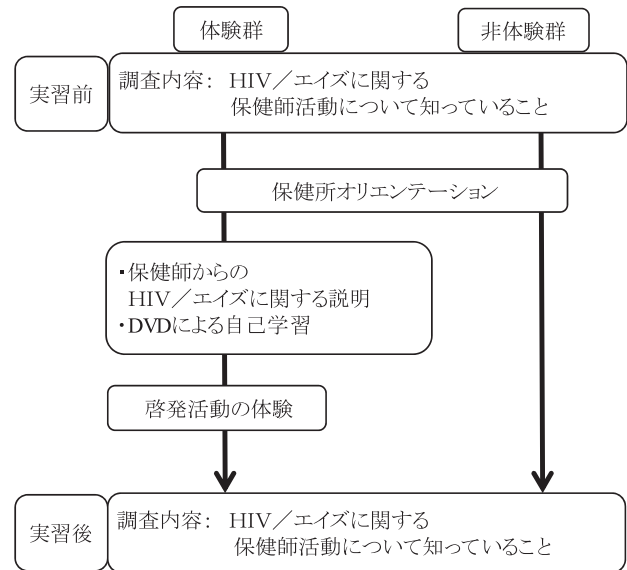


図1 調査の過程

2群間比較にはt検定を用いた¹⁴⁾。分析ソフトはPASW17 for Windowsを使用し、両側検定にて有意水準5%とした。

保健師活動に関する自由記述の分析は内容分析の手法¹⁵⁾を参考にした。まず、自由記述の文章から保健師活動を表している内容を抽出したあと、意味内容をコード化した。群ごとに相違性および類似性に留意しながら文章を分類し、抽象度を上げてサブカテゴリーを生成した。さらに、サブカテゴリーの相違性および類似性に留意しながら分類・整理し、カテゴリーを生成した。啓発活動の体験による学びを浮き彫りにするために、群ごとに実習前後に区分した表を作成し、サブカテゴリーの欄に記述があった学生数を記載した。尚、本文中ではカテゴリー名を『 』、サブカテゴリー名を〈 〉で表記する。

4. 倫理的配慮

本研究は所属する大学の倫理委員会の承認を得て行った（番号22-95）。学生に対し、口頭および文書にて研究目的、方法、研究協力は任意であること、参加拒否による成績等への不利益は全くないこと、途中で拒否することも可能であること、研究データは記号化し個人を特定しないこと、またデータは研究以外に使用せず処理すること等を説明し、承諾が得られた学生からは同意書に署名を得て、無記名による調査を実施した。

III. 結果

実習前後の質問紙調査の分析結果を以下に示す。

表 1 知識問題の項目と正答率 (%)

	体験群		非体験群		
	実習前	実習後	実習前	実習後	
各項目について、正しいものに○をつけなさい。					
1 HIV はエイズがまだ発症していない人からは感染しない	100.0	100.0	100.0	100.0	
2 HIV に感染した人を刺した蚊に刺されても、刺された人が HIV に感染することはない	16.7	50.0	20.0	0.0	
3 感染者が使用した洋式の便座に座っても安全である	83.3	100.0	80.0	60.0	
4 HIV は、軽いキスであっても必ず感染してしまう	83.3	100.0	100.0	100.0	
5 性的接触による感染を防ぐための最も有効な方法はコンドームを使用することだ	100.0	100.0	100.0	100.0	
6 特定のパートナーだけとの性行為であれば、HIV の感染の心配はない	66.7	100.0	100.0	100.0	
7 HIV 検査を受けられるのは病院だけだ	100.0	100.0	100.0	100.0	
8 献血に行けば HIV 検査を受けることができる	66.7	66.7	80.0	80.0	
9 HIV 検査は、保健所であれば実名を告げなくても受けることができる	83.3	100.0	100.0	80.0	
10 HIV に感染した場合、有効な治療法は全くない	100.0	100.0	100.0	100.0	
11 HIV は B リンパ球の中で増える	83.3	100.0	100.0	100.0	
12 HIV 抗体検査は感染後ただちに陽性となる	83.3	100.0	100.0	100.0	
13 エイズ患者では、知能低下や運動障害などの脳神経症状をきたすことが少なくない	66.7	83.3	80.0	40.0	
14 エイズ患者は隔離して入院させる必要がある	100.0	100.0	100.0	100.0	
15 ウィルスは消毒用アルコールでは不活性化されない	50.0	66.7	20.0	40.0	
16 エイズの専門治療のため拠点病院が整備されている	0.0	33.3	80.0	100.0	
17 HIV は母子感染しない	100.0	100.0	100.0	100.0	
最近の日本の状況について、正しいものに○をつけなさい。					
18 HIV に感染するとエイズ発症は防止できない	83.3	100.0	80.0	100.0	
19 同性間の性的接触による感染は減少している	100.0	100.0	100.0	100.0	
20 HIV 感染者・エイズ患者の報告件数は減少傾向にある	100.0	100.0	80.0	100.0	
21 地方大都市圏においても報告が増加し、地域拡散傾向にある	83.3	33.3	80.0	80.0	
22 新規 HIV 感染者の報告件数の約 9 割日本国籍の者である	0.0	16.7	0.0	0.0	
保健所でエイズの抗体検査を実施する場合、正しいものに○をつけなさい。					
23 検査の際には、他職員や来訪者との接触を避ける配慮も必要である	66.7	33.3	80.0	80.0	
24 検査結果の連絡先・被検査者名を記入した台帳は、特定の職員以外は扱わない	16.7	33.3	0.0	20.0	
25 検査結果は、プライバシー保護の観点から電話で伝える	66.7	66.7	60.0	80.0	
26 感染の告知による影響が大きいと予想される場合には、配偶者などを通じて伝える配慮も必要である	50.0	83.3	40.0	60.0	
27 検査を受ける者の不安や苦悩に対しては、できるだけ関知しない	100.0	100.0	100.0	100.0	
28 HIV/ エイズ予防対策で最も優先度の高い対象はどれか ・妊婦 ・女性同性愛者 ・外国人 ・青少年	33.3	33.3	0.0	40.0	
29 保健所で 10 代の若者を対象にエイズ・ピア・エデュケーション事業を実施した。 ピア・エデュケーターの活動で適切なのはどれか ・高校教師へのエイズ予防教育 ・思春期の子どもを持つ親への面接相談 ・コンドームの正しい使い方の学園祭でのパネル展示 ・命の大切さをテーマにした中学生の保護者対象の講演会	50.0	33.3	40.0	60.0	
30 「はじめて会った人と 1 週間前にコンドーム無しで性交渉を持った。エイズの感染が心配」という電話を受けた。保健師の対応で最も適切なのはどれか ・性交渉が 1 回であれば感染の心配はありません ・次回からコンドームを使えば安心です ・感染の機会から 8 週間経過後に検査を受けてください ・早急に医療機関を受診して γ -グロブリンの投与を受けてください	83.3	100.0	80.0	60.0	
基礎的問題の平均正答率		80.0	91.7	88.0	82.0
全体の平均正答率		70.6	77.8	73.3	76.0

*問題 1 ~ 10 : 基礎的問題 問題 11 ~ 30 : 国試レベル問題

1. HIV/エイズに関する知識問題について

○×形式の HIV/エイズに関する知識問題の調査を実施し、各問題の正答率を表 1 に、2 群の平均点を表 2 に示した。

体験群における問題の合計点数は実習前 21.2 ± 3.5 点、実習後 23.3 ± 1.0 点、差は 2.2 ± 3.2 点であり、非体験群は 22.0 ± 3.5 点、22.8 ± 2.3 点、0.8 ± 1.3 点であった。2 群間で差を比較した結果、 $t(9) = 0.892$, $p = 0.396$ であり、有意差はみられなかった。同様に基礎的問題では体験群 1.2 ± 0.6 点、非体験群 -0.6 ± 0.6 点、 $t(9) = 4.358$, $p = 0.002$, 国試レベル問題では体験群 1.0 ± 3.0 点、非体験群 1.4 ± 1.5 点、 $t(9) = -0.272$, $p = 0.792$ であり、基礎的問題において有意差がみられた。

問題の正答率でみると、体験群の実習前 70.6%、実習後 77.8%、非体験群は 73.3%、76.0%であった。問題の項目別にみると、実習後に正答率が上昇した項目数は体験群 12 問、非体験群 9 問であった。体験群では基礎的問題と国試レベル問題ともに正答率

が上昇したが、非体験群では国試レベル問題のみで上昇した。2 群ともに正答率が低い項目は、エイズ治療の拠点病院、日本での新規 HIV 感染者の多い国籍、抗体検査時の保健所の対応、HIV/エイズ予防対策の優先度の高い対象、ピア・エデュケーターの活動についてであり、いずれも国試レベル問題であった。

2. HIV/エイズに関する保健師活動について

実習前後の自由記述の文章から生成された HIV/エイズに関する保健師活動についてのカテゴリー・サブカテゴリーを表 3 に示す。全体では『啓発活動の手段』『啓発活動のねらい』『HIV/エイズに関する保健師活動の実際』のカテゴリーに集約された。体験群では『啓発活動の手段』としての〈レッドリボンというシンボルマーク〉、『啓発活動のねらい』としての〈検査の受診勧奨〉など、非体験群に比べて新たなサブカテゴリーが抽出された。

表 2 HIV/エイズに関する知識問題の平均点比較 (点)

	基礎的問題			国試レベル問題			合計		
	実習前	実習後	差	実習前	実習後	差	実習前	実習後	差
体験群	8.0 ± 1.4	9.2 ± 1.0	1.2 ± 0.6	13.2 ± 2.6	14.2 ± 1.2	1.0 ± 3.0	21.2 ± 3.5	23.3 ± 1.0	2.2 ± 3.2
非体験群	8.8 ± 1.1	8.2 ± 1.3	-0.6 ± 0.5	13.2 ± 2.5	14.6 ± 1.3	1.4 ± 1.5	22.0 ± 3.5	22.8 ± 2.3	0.8 ± 1.3

** : $p < 0.01$ n.s. : 非有意

表 3 HIV/エイズの保健師活動の自由記述

カテゴリー名	サブカテゴリー名	体験群		非体験群	
		実習前	実習後	実習前	実習後
啓発活動の手段	ポスター、パンフレット等配布	2	2	2	3
	学校への出前講義	4	5	1	1
	街頭キャンペーン	1	1		
	レッドリボンというシンボルマーク		1		
	HIV/エイズの予防月間		1		
	HIV/エイズの啓発 DVD		2		
	エイズ・ピア・エデュケーション		1		
啓発活動のねらい	予防方法の伝達	1	1	1	1
	正しい知識の伝達	1	1		
	検査の受診勧奨		3	2	3
HIV/エイズに関する保健師活動の実際	啓発活動	3	4	2	3
	匿名性/無料での血液検査	4	5	3	4
	電話相談	1	2	1	1
	HIV 感染者、エイズ患者への地域生活支援	1	2		1

数字は記述があった人数を示す

IV. 考察

まず、HIV/ エイズに関する知識面から考察する。知識問題の点数の差の比較では体験群と非体験群との間に有意差はみられなかったことから、啓発活動の体験が即座に知識の獲得につながるとはいえないことが示唆された。基礎的問題の差においては体験群が実習後に有意に高く、国試レベル問題では有意差はみられなかったことから、不確かであった HIV/ エイズに関する知識のうち啓発活動に向けた保健師の説明や自己学習、体験によって基礎的知識のみが確かな知識に強化されたといえる。しかし、2群間の比較において本調査の欠点である対象者数の少なさは無視できない。数年分のデータを蓄積することでより信頼性のある結果を導きたいと考える。

項目の平均正答率をみると 70～78%、基礎的問題では 80～92%であった。看護学生を対象に HIV/ エイズに関する一般的知識を調査した研究では⁹⁾、3年生 52.9%、4年生 68.9%の正答率であった。質問項目に相違はあるが、ほぼ同様の結果が得られたと考える。しかし、HIV に感染した人を刺した蚊が感染源になるか否かについては、実習前の正答率は 20%程度であり 2群ともに非常に低かった。企業の新入社員への HIV/ エイズに関する一般的知識を調査した研究では¹⁶⁾、HIV に感染した人を刺した蚊が感染源になるか否かの項目の正答率が 61.6%であった。間違った知識は一般人のみならず HIV 感染者、エイズ患者への保健指導に影響を及ぼす。国試レベル問題の弱さと合わせて、正確な知識の伝達をこれまで以上に講義という機会を通じて行っていく必要があると考える。

次に HIV/ エイズに関する保健師活動の点から考察する。体験群の実習後に抽出されたカテゴリーは、『啓発活動の手段』『啓発活動のねらい』『HIV/ エイズに関する保健師活動の実際』であり、非体験群と比較すると多くのサブカテゴリーが抽出された。これらは啓発活動に際して実施された保健師からの説明、DVD による自己学習の影響が大きいと思われた。また、非体験群の実習後に〈ポスター、パンフレット等配布〉〈啓発活動〉などが抽出されていたが、大学構内で行われた啓発活動が学内実習日と重複していたことも影響したと考える。

別の視点からサブカテゴリーをみると、〈電話相談〉〈エイズ・ピア・エデュケーション〉〈HIV 感染者、エイズ患者への地域生活支援〉など個・集団・地域という保健師が働きかける対象の拡がりの視点が含まれていた。また、〈啓発活動〉〈匿名性/ 無料での血液検査〉〈HIV 感染者、エイズ患者への地域

生活支援〉など予防から検査・治療・ケアという一貫した関わりの視点もみられた。地域看護学実習では個への働きかけの学びが多くなる傾向があるとの調査結果がある¹⁷⁾。1つの実習体験は1時点の関わりのため、保健師活動を流れや拡がりとして捉えることは困難であるが、今回の保健師との啓発活動の体験からの学びをみると有用な機会であったと思われる。しかし、これらの視点はなかなか気づきにくい。教員からの助言により深めていく必要があると考える。

非体験群の実習後のサブカテゴリーに、『HIV/ エイズに関する保健師活動の実際』として〈HIV 感染者、エイズ患者への地域生活支援〉がみられた。非体験群では感染症関連の実習体験はなく、発達障害の理解を深めるためのセミナーと乳幼児の精密健康診査の見学のみであった。発達障害をもつ児への保健師の役割の学びを社会的弱者という大枠の対象として捉え、『HIV/ エイズに関する保健師活動の実際』という学びに拡大したものと思われる。実際的な実習体験がなくても、1つの実習体験から多くの学びに繋げていけることがわかり、教員による助言や指導力の重要性が示唆された。

V. おわりに

本研究では、保健師とともに地域看護学実習の一環として行った啓発活動から得た学びを HIV/ エイズに関する知識面と保健師活動の 2 点から明らかにするために、実習前後の質問紙調査から以下の結果を得た。

1. 啓発活動の体験は HIV/ エイズに関する知識、とくに基礎的知識を得る機会になっていたといえる。今後はさらに対象者数を増加し再検討していく。
2. 啓発活動の体験は HIV/ エイズに関する保健師活動の理解を深めることにつながっていた。

2012 年度からの新カリキュラムの導入により、専門性の高い保健師教育が望まれる。啓発活動を体験した学生数は 6 名と少数であり、標本数が充足しているとはいえないが、今回の調査から 1つの実習体験が学びの拡大に繋がることがわかり、実習の1内容として意義があったといえる。今後も保健師とともに啓発活動の体験を継続していき、更なる学びへと繋げていきたいと考える。

謝 辞：学生に啓発活動の体験の機会を与えて下さいました保健師の方々に厚く御礼申し上げます。

文献

1. 全国保健師教育機関協議会：平成20年度保健師教育の課題と方向性明確化のための調査報告書第2版(2009), 2012-12-20.
http://www.zenhokyo.jp/work/doc/h20houkokusyo_hokenshikyoikucyosa.pdf.
2. 小松崎愛美, 工藤恵子, 小川敬子ら：体験による学生の学び 保健所・市町村実習の学びから. 武蔵野大学看護学部紀要, 4: 49-61, 2010.
3. 藤丸知子, 岩永洋子, 稗圃砂千子ら：地域看護学実習における学生の学びの到達度の検討. 長崎県看護学会誌, 7(1): 27-34, 2011.
4. 金山時恵：保健師学生の地区把握に関する学習成果と教育方法のあり方. インターナショナル Nursing Care Research, 9(1): 143-152, 2010.
5. 辻よしみ, 林佳子, 高嶋伸子ら：地域看護学実習における健康教育の内容と評価. 四国公衆衛生学会雑誌, 55(1): 150-153, 2010.
6. 山田淳子, 中山かおり, 齋藤智子ら：地域看護学実習における学生の学びからみた家庭訪問実習の効果と課題. 日本地域看護学会誌, 11(1): 81-86, 2008.
7. エイズ動向委員会報告：エイズ予防情報ネット, 2013-7-30, <http://api-net.jfap.or.jp/status/index.html>.
8. 橋本美貴, 廣田彬世, 松本藍ら：若者に向けての効果的なエイズ予防パンフレット作成とその評価を通して. 藍野学院紀要, 19: 51-57, 2006.
9. 中桐佐智子, 合田ひろみ, 岡本陽子ら：看護学生のエイズに関する知識と意識・性行動の調査. インターナショナル Nursing Care Research, 9(3): 51-61, 2010.
10. 荒賀直子, 後閑容子編集：地域看護学.jp 改定第2版, インターメディカル, 東京, pp 334-343, 2010.
11. 市川誠一監修：HIV/エイズ基礎知識検定, 2012-11-1, <http://minna.cert.yahoo.co.jp/cisal/324062>.
12. メヂカルフレンド社編集部：2013年版 保健師国家試験問題 解答解説, メヂカルフレンド社, 東京, pp 106-124, 2010.
13. 保健師国家試験問題研究会：保健師国家試験オリジナル予想問題集 2011年版, インターメディカル, 東京, pp 303-304, 2010.
14. Harvey Motulsky：津崎晃一訳：数学いらずの医科統計学 第2版, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 東京, pp 225-249, 2011.
15. Klaus Krippendorff：三上利治, 椎野信雄, 橋元良明訳：メッセージ分析の技法「内容分析」への招待. 勁草書房, 東京, pp 21-39, 1989.
16. 山本貴子, 前崎かおり, 中川久美子ら：エイズの予防知識啓発に関する講習会の有効性 エイズ講習前後のアンケート調査, 三重看護学誌, 3(1): 33-39, 2000.
17. 大橋裕子, 白石知子, 小塩泰代ら：地域看護学実習において学生がとらえた保健師の活動と役割, 中部大学生命健康科学研究所紀要, 8: 44-48, 2012.